# WEP 俳句通信

ウエップ俳句通信 VOL.95

特別作品25句●山崎房子「今年の秋」

特集●本誌92号の特集〈俳句の現在——7人の場合〉を
どのように読んだか

奥坂まや　「季語の世界の新しさ」
坂口昌弘　「俳句の今の固有性と多様性」
髙柳克弘　「二つの書き方」
谷口智行　「七人の特集を恐々拝見すれば…」
富田正吉　「さまざまなる意匠の〈現在〉」
中村雅樹　「俳句の辺境はどこだ」
西池冬扇　「〈非情〉の俳句という誘いかけ」
秦　夕美　「明日は明日の」
武藤紀子　「岸本尚毅氏の場合」

市川榮次100句
「癌告知」

【実力作家競詠20句】
奈良文夫　「的中」
酒井弘司　「草雲雀」
西嶋あき子　「絹虫」

●作品●
伊丹三樹彦・田中水桜・下鉢清子・丸鬼あきま・沼口貴子・渡戸岡見・南宮恒星・大木さつき・菊地一雄・森藤信義・磯　清道・榎　祝代・杉浦恵子・西池みどり・井沼真一・広瀬原美子・髙橋手帖　ほか

●エッセイ●
新連載　藤田湘子第十句集『神楽』を読む「あかつきに雪降りし山」黒澤あき穂
新連載　辭耳草子「バンジージャンプ」西池冬扇

先人に学ぶ俳句「飯田蛇笏（十五）——句集『家郷の雲』（二）」岸本尚毅
俳句とともに「飯田龍太の風景——井伏鱒二との交流」井上康明
新しい詩学のはじまり「社会性俳句の形成（上）／伝統俳句の崩壊」筑紫磐井
岡本眸の俳句「冬の水——身辺俳ほか」小川美知子
森澄雄の俳句鑑賞「炎天より僧ひとり乗りて（二）」千田祝代
三橋敏雄『眞神』考「赤く流れ出む」北川美美

# 冬来たる木曾

開田高原・写真館

# 書斎にて

安西 篤

# 特別作品25句

## 今年の秋

山崎房子

しんしんと木犀の香の昼下り

鬱の虫起してならじ菊枕

朋遠方ヨリ来タル（初めて会ふ）駿河台の秋

ニコライ堂湯島聖堂雁渡し

床にはづむよ風船葛の種

口を出でゆきし言葉やうそ寒う

本誌92号の特集〈俳句の現在——7人の場合〉については
少なからぬ反響がありました。そこでこの特集をどのように読んだか、
率直な感想・意見を8人の方にお書きいただきました。

特集

# 「本誌92号の特集〈俳句の現在——7人の場合〉をどのように読んだか」

新しい詩学のはじまり（六）

# ――社会性俳句の形成①／伝統俳句の開始

筑紫磐井

**伝統俳句ブーム**

戦後俳句史において兜太と双璧として語られるのは、飯田龍太や森澄雄であろう。兜太が「前衛」であれば、龍太や澄雄は「伝統」の代表となる。しかしそれだけでは、兜太対龍太とは、「前衛」対「伝統」の代名詞で終わってしまう。もちろん、単純で図式的な戦後俳句史が読み説かれても思くはないが、俳句に深みを与えるのは新しい歴史の見方だ。そしてもうすこし新しい戦後俳句史を作ろうとするなら、新しい切り口を幾つか考えて、試行錯誤してみることが必要だ。

もう一つは、兜太は造型俳句論により新しい詩学を考察した。これは現在に至るまで大きな功績として俳句史に残っている。しかし、兜太と対峙しようとした俳句理論が――特に伝統俳句に影響を及ぼした俳句理論が――いったい何であったのかはよく分からない。

兜太と当時最も激しく対立したのは中村草田男であるが、草田男の主張が根本のところで兜太と全く異種・対立したかと言えば、そんなことはない。草田男と兜太はあるところまで同根であり、俳句を見るまなざしは同じである。対立したのは世代対立にすぎなかった。その証拠に、現在俳句の主流を占めていると言われる伝統俳句において、草田男の影響は極めて薄い。草田男があったために、現在の伝統俳句が守られたなどと言うことは全くないのである。

これに対して、龍太や澄雄はよほど現代の伝統の源流と言うことができる（この際高浜虚子はしばらくおいておく）。しかし、龍太や澄雄には独白的な感想は多いものの、兜太と対比できる俳句理論は生み出していない。そうしたものがなくても伝統は復活できたという考え方もあるかもしれないが、やはり詩としての主張のないジャンルは衰退するしかないであろう。

私は以前から、兜太に対峙するのは、実作において龍太や澄雄であったものの、理論的な対立は草間時彦や能村登四郎であったろうと主張している。拙著『伝統の探求』において述べたことと重複するがここに述べてみよう。龍太や澄雄の実作を、時彦や登四郎が理論的に裏打ちすることによって、伝統の延命が生まれたのであろうと思って

# 市川榮次100句

## 癌告知

癌告知二百十日の直近に

竜田姫なりや癌第一発見者

夏痩せと思ひしが癌進行中

汗滂沱死ぬなとでかい声で言ふ

天の川ひとりにはかにうろたへて

日雷宣戦布告受けて立つ

風死すや抗がん剤の初投与

星月夜治療てふ名の汽車に乗り

かはほりの弦空飛行ただならず

# 超結社句会／新12番勝負

前列右から　今富氏、岩永氏、山田氏
後列右から　星野氏、槍田氏、藤本氏

ゲスト　今富節子・岩永佐保
槍田良枝・山田径子
ホスト　星野高士・藤本美和子

**編集長**　超結社句会第36回目です。ゲストは「貂」同人の今富節子さん、「鷹」同人の岩永佐保さん、「未来図」同人の槍田良枝さん、山田径子さん。ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さんです。遠慮のない意見交換をお願いします。

**高士**　4点句が2つ。3点句が2つ。今日は点が割れました。名乗りは最初から上げないでください。自分の句でも褒めたりけなしたりしてください。この句会は演技力が必要です。では、始めます。

そののちの沙法なきポインセチアかな　節子

**径子**　「ポインセチア」は色が赤いとか、人に贈るとか詠まれがちなんですが、「沙法なき」といってポインセチアに対して不実な人のことを思うという句で面白いと思いました。

**節子**　やったりとったりの感じが「沙法なき」で、すごく出ていると思いました。

**良枝**　「ポインセチア」は強烈な赤さがあって、「そののちの沙法」はよく分からないんですが、その沙法のなさをこの